

# 都市の人口規模と織物衣服身回品 飲食料品販売額との関係

——39年商業統計による——

木 地 節 郎

は し が き

- I 人口規模別販売高
- II 人口1万人当り販売高
- III 小売総額に対する織物衣服身回品および飲食料品販売額の割合
- IV 飲食料品販売額に対する織物衣服身回品販売額の割合

む す び

は し が き

昭和39年商業統計によって小売販売高を都市の人口規模を基礎に整理して両者の関係をすでに概観したのであるが<sup>1</sup>、これをさらに進めて、織物衣服身回品と飲食料品の販売高をとりあげ、これを都市の人口規模との関係から検討してみることにする。

商業統計においては各種商品、百貨店、織物衣服身回品、飲食料品、自転車荷車、家具什器、およびその他に分かれているが、このうち、織物衣服身回品と飲食料品についてとりあげるのは、前者が買回品の代表であり商圏の大小が販売高に関係すると思われ、また、後者は主として当該都市内で購入され、しかも当該都市外からの購入が比較的少ないと思われる商品であることによるものである。

1 拙稿「都市の規模と小売販売高」『同志社商学』第19巻第4号、1968年。

## I 人口規模別販売高

## 1. 人口100万以上の都市

所謂百万都市以上の場合は第1表のようにになっている。

第1表 人口100万以上の都市の販売高

	人 口 (40年)	織物衣服身廻品	飲 食 料 品
東 京	8,893,094人	22,296,928万円	49,018,648万円
大 阪	3,156,222	7,579,128	16,549,616
名古屋	1,935,430	3,824,939	8,757,344
横 浜	1,788,915	2,998,025	8,922,198
京 都	1,365,007	2,351,693	6,197,074
神 戸	1,216,666	2,320,769	4,813,915
北九州	1,042,388	1,619,653	4,108,568

人口100万以上の都市といっても、東京、大阪と他の100万代の都市ではかなり差がある。また、100万代の中でも190万代の名古屋と100万代の北九州とでも差があるが、一応人口が100万代の都市として平均してみると、織物衣服身廻品は262億3015万円、飲食料品は655億9219万円となる。

## 2. 人口50～80万代の都市の平均

人口が50～80万の都市は川崎、札幌、福岡、広島、尼崎の5市である。これらの都市については、第2表のように人口からは80万代1市、70万代2市、50万代2市に分けられるので、それぞれのグループについて平均を

第2表 人口50～80万代の都市の販売高

	人 口 (40年)	織物衣服身廻品	飲 食 料 品
川 崎	854,866人	1,418,430万円	3,718,006万円
札 幌	794,908	1,926,422	4,088,784
福 岡	349,808	1,561,803	3,296,799
広 島	504,245	1,457,139	2,423,119
尼 崎	500,990	767,311	1,678,234

とってみると第3表のようになる。人口80万代は1市だけであるが、平均をとってみると織物衣服身回品については人口の大小に関係していないが

第3表 人口50～80万代の平均販売高

	織物衣服身回品	飲 食 料 品
人口80万代	1,418,430万円	3,718,006万円
70 "	1,744,113	3,692,792
50 "	1,112,225	2,050,677

飲食料品の方はやや関係していることがわかる。いうまでもなく、この場合は川崎が東京に近いため織物衣服身回品の購買力が市外に流出しているのに対し、人口70万代の札幌、福岡はいずれも中心都市であり、広く市外から購買力を吸収していることによるものである。

### 3. 人口10～40万代の都市の平均

#### a. 全 般

人口規模の大小と織物衣服身回品および飲食料品の販売高の関係を考えた場合に、ごく一般的には前者は商圈の大きさに、後者は都市人口の大きさに直接関係するとみてよいだろう。

ところで、実際に各都市における状況はどうなっているかを第4表をもとにしてグラフにしてみると第1図のようになり、飲食料品の方が織物衣服身回品よりも分布の幅が広がっていることがわかる。

第4表 人口10～40万代の都市の平均 (万円)

人 口	小売総額 の 平 均	織物衣服身回品 の平均販売額	飲食料品の 平均販売額	該 当 す る 都 市
万人代				
48	6,130,926	1,033,105	2,125,912	仙台
46	2,743,220	405,608	1,302,640	堺
40	3,925,829	735,211	1,398,661	熊本, 長崎
39	3,661,444	828,975	1,331,051	浜松
36	3,980,486	850,389	1,316,402	姫路, 静岡
35	3,931,686	735,506	1,447,606	岐阜, 新潟

33	3,395,535	604,531	1,418,068	西宮, 金沢, 千葉
32	3,109,504	581,563	1,066,048	和歌山, 鹿児島
31	3,499,944	648,721	1,721,132	横須賀
29	2,804,920	551,750	1,000,296	豊中, 岡山
28	2,570,100	689,315	862,189	松山
27	2,735,414	484,959	1,482,096	布施
26	3,206,681	583,862	1,169,002	宇都宮
25	2,308,406	385,501	926,632	下関
24	3,252,956	497,808	1,066,379	川口, 佐世保, 旭川, 高松, 函館
23	2,458,747	460,230	1,366,270	富山, 豊橋
22	1,841,688	374,924	764,109	大分, 呉, 青森, 船橋, 郡山, 浦和
21	2,341,994	512,112	909,502	四日市, 清水, 高知, 秋田, 大宮
20	1,817,377	393,509	757,901	市川, 八王子, 一宮
19	1,714,960	325,232	770,244	前橋, 吹田, 小樽, 岡崎, 大牟田 山形, 徳島
18	1,747,017	366,321	594,899	八戸, 宮崎
17	2,176,689	339,423	715,290	日立, 盛岡, 藤沢, 釧路, 高崎 福島, 長野, 甲府, 八尾, 福山
16	1,381,979	255,068	586,892	福井, 相模原, 室蘭, 奈良, 松戸
15	1,700,697	400,162	585,980	沼津, 明石, 宇部, 久留米, 水戸 長岡, 松本, 弘前, 足利
14	1,432,353	293,683	557,732	倉敷, 岸和田, 小田原
13	1,307,801	309,126	534,174	高岡, 守口, 三鷹, 平塚, 佐賀 武蔵野, 高槻
12	986,585	186,390	397,216	桐生, 牧方, 川越, 府中, 新居浜 延岡, 伊丹, 大津
11	1,064,448	219,845	442,335	別府, 鎌倉, 春日井, 調布, 帯広 津, 町田, 茨木大垣, 寝屋川 松江
10	958,637	197,333	361,523	熊谷, 柏, 鳥取, 都城, 豊田, 岩国, 小平, 今治, 八代, 伊勢 会津若松, 加古川, 立川, 鈴鹿 茅ヶ崎

この点について説明する材料は今回の資料からは直接出てこないが、商圏の大きさは一般的には都市の人口規模に関係するため、都市人口一商圏の大きさ一織物衣服身回品という形であらわれるものとみられる。これに対して、飲食料品の場合はその都市の消費水準および市外購買力の吸収にも関係することから都市人口との関係が織物衣服身回品にくらべて幅が出

ていると考えてよいのではなからうか。

#### b. 人口40万代の都市

40万代は仙台、堺、熊本、長崎の4市であるが、仙台は他の3市に比較して人口の割合からみても販売高は非常に大きくなっている。これに対して、堺は40万人代の熊本、長崎よりも販売高が少なく、購買力が大阪に流出している点があらわれている。特に、織物衣服身回品についてはこの傾向が顕著である。

#### c. 人口30万代の都市

小売総額ではすべて300億円代であるが、36～35万人代の都市では390億円であり、32万代の都市では310億円であるからかなりの差がみられる。しかも、36～35万人都市についても、36万人代では織物衣服身回品の販売高が多いのに対し、35万人代では飲食料品の販売高が多くなっている。

32万人代の都市は織物衣服身回品、飲食料品ともに少なく、これが小売総額の少ないことに関係しているとみてよいだろう。

織物衣服身回品についてみると、39、36、35万人代の都市が多く、33、32万人代の都市が少なくなっている。前者には県庁所在地都市のほか、浜松、姫路のように商圈の立地に恵まれている都市が含まれている。これに対して、後者にも県庁所在地都市が入っているが、大都市に近いか低所得地域であることが原因になっているように思われる。ただし、31万人代は横須賀だけであるが、織物衣服身回品、飲食料品ともに人口対比では多い。

#### d. 人口20万代の都市

小売総額では26、24万人代の都市が300億円をこえて多く、22、20万人代の都市が200億円以下になっている。

しかし、織物衣服身回品の販売高からみると、28万人代の松山が特に多く21万人代の都市も50億円をこえていて多い。飲食料品では、27万人代の布施が140億円をこえて多くなっている。これに対して、織物衣服身回品の販

売高が多い松山が飲食料品では80億円代になっていて少なくなっている。

### e. 人口10万人代の都市

小売総額では17万人代の都市が200億円をこえているが、織物衣服身回品では特に多い方でない。むしろ、15万人代の都市の方が40億円になっていて多い。

人口12万人代以下の都市では織物衣服身回品の販売高がそれ以上の人口規模の都市に比較すると少なくなっているといえる。飲食料品についてもこの傾向が少しみられるようである。

## 2. 人口99,999以下の都市

### a. 全 般

全国平均でみると

	織物衣服身回品	飲 食 料 品
9万人代	15億円代	29億円代
8	13	29
7	13	24
6	9	18
5	9	17
4	6	13
3	4	9
2	3	6

ということになっている。

第5表 地方別人口規模別平均販売高(万円)

		9万人代	8万人代	7万人代	6万人代	5万人代	4万人代	3万人代	2万人代
北海道	織衣身		130,230	160,818	177,382	100,430	81,091	75,801	33,491
	食料		455,689	301,632	333,921	261,016	196,942	145,544	152,188
東北	織衣誤	183,580	169,539	170,619	121,336	124,359	75,473	47,534	20,914
	食料	343,231	301,022	231,349	210,834	190,012	114,028	85,679	40,322
関東	織衣身	129,347	131,494	145,974	96,978	95,696	66,119	54,593	31,451
	食料	248,817	204,416	250,600	208,581	183,269	150,384	102,354	65,553

北 陸	織衣身	137,319		165,421	83,316	103,874	73,867	51,798	41,177
	食 料	263,055		272,049	128,947	163,980	134,092	83,453	62,216
中 部	織衣身			240,406	103,292	103,872	73,344	63,804	40,988
	食 料			379,583	155,836	189,353	146,763	108,649	74,266
東 海	織衣身	187,381	134,361	134,260	84,271	83,285	109,049	40,687	
	食 料	371,804	276,245	238,633	147,729	193,345	128,843	88,725	
近 畿	織衣身	189,031			115,639	76,851	90,021	41,380	90,643
	食 料	317,848			183,466	134,243	130,379	86,167	89,042
山 陰	織衣身	226,628			146,117	81,273	71,707	31,060	
	食 料	351,734			174,543	150,379	122,108	92,809	
山 陽	織衣身	184,445	175,749	162,075	91,508	80,088	53,754	46,877	37,521
	食 料	278,116	254,485	210,185	174,793	153,422	148,176	91,100	75,346
四 国	織衣身				141,414	79,265	45,976	45,492	24,795
	食 料				188,775	121,767	88,259	91,636	52,138
九 州	織衣身		251,215	113,420	73,718	113,155	59,766	38,159	25,728
	食 料		338,971	202,466	141,802	158,947	114,332	77,054	53,825
衛 生 都 市	織衣身	37,495	69,373	34,254	71,937	40,616	27,591		
	食 料	248,009	209,604	196,820	217,348	150,857	105,237		
全 国	織衣身	150,187	139,503	135,632	97,996	91,812	69,602	47,449	34,079
	食 料	298,872	298,905	245,064	188,155	174,866	134,304	90,761	66,320

織衣身＝織物衣服身回品      食料＝飲食料品

人口6万人代は織物衣服身回品、飲食料品ともに低い。

また、人口7万人代までの織物衣服身回品販売高の増加状況に比較すると人口8、9万人代のそれは少ない。

#### b. 9万人代の都市

織物衣服身回品では山陰が多くなっているが、これは米子である。飲食料品は山陰が多いが、東海の34億円代も多い。東海では松阪の45億円代がある。

#### c. 8万人代

九州が多く、織物衣服身回品では平均の2倍に近い。もっとも8万人代

は飯塚だけで、この織物衣服身回品の25億円代、飲食料品の33億円代というのは飯塚の販売高である。山陽もこれに次いで多く、徳山、三原が該当する。特に、徳山は織物衣服身回品19億円代、飲食料品28億円代が多い。

#### d. 7万人代

中部は多く、都市としては飯田、上田の2市がある。上田は織物衣服身回品が27億円代、飲食料品が43億円代で特に多い。反対に、九州は少ない。九州の人口7万人代は田川、唐津、鹿屋の3市で、このうち、田川が多いがそれでも織物衣服身回品14億円代、飲食料品29億円代であり、唐津が10億円代と18億円代、鹿屋が9億円代と12億円代となっていて平均を下げている。

#### e. 6万人代

北海道は岩見沢と美唄があり、このうち、岩見沢は織物衣服身回品25億円代、飲食料品37億円代と多く、このため平均も多くなっている。山陰も多いが、これは出雲である。九州は少なくなっている。該当する都市は伊万里、諫早、荒尾、日田、川内の5市であるが、荒尾が織物衣服身回品1億円代、飲食料品12億円代で少ない。

#### f. 5万人代

東北と九州が多い方であり、四国が少ない。東北の人口5万人代の都市は古川、塩釜、大館で、塩釜は織物衣服身回品17億円代、飲食料品27億円代が多い。また、九州には直方、大川、大村、中津、佐伯、日南の6市がある。中津は織物衣服身回品20億円代、飲食料品17億円代で多く、しかも他都市とちがって前者の方が多い。直方も13億円代と22億円代が多い。四国には阿南、丸亀、西条、八幡浜の4市があり、阿南が織物衣服身回品4億円代、飲食料品11億円代、また西条が6億円代と9億円代で少なくなっている。

#### g. 4万人代



北海道が多く、この中には三笠、赤平、根室、江別、網走、滝川、紋別、留萌の8市があり、根室が織物衣服身回品10億円代、飲食料品25億円代で多く、滝川も11億円代と18億円代が多い。東海は織物衣服身回品では全国平均よりも多いが、飲食料品は少ない。地区別によると四国が最も少ない。四国の人口4万人代の都市は鳴門、観音寺、大洲、南国の4市で、大洲は織物衣服身回品2億円代、飲食料品6億円代であり、南国は1億円代と8億円代で少ない。

#### h. 3万人代

北海道には士別、名寄、深川、砂川の4市があり、織物衣服身回品では名寄10億円代、深川、砂川が7億円代で多く、飲食料品では砂川16億円代、歌志内15億円代が多い。地区別で少ないのは九州で、織物衣服身回品が2億円代は筑後、中間、平戸、松浦、牛深、串間、指宿、串木野、西之表と多い。また、飲食料品が6億円代およびそれ以下のところに平戸、松浦、牛深、宇土、大口、国分、串木野、枕崎、西之表などがある。

#### i. 2万人代

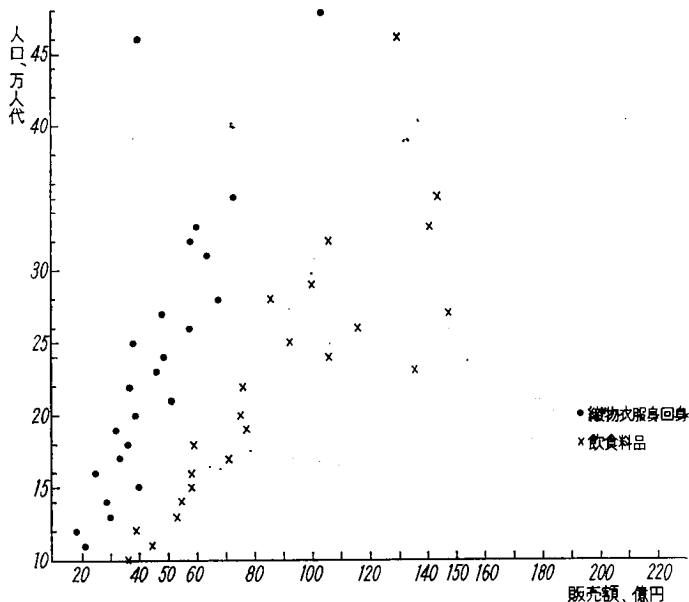
北海道は飲食料品だけでなく、織物衣服身回品とともに多いのは近畿である。東北は少ない。近畿は八日市のことである。また、東北は尾花沢のことである。

### 3. 人口規模による販売高の傾向線人口

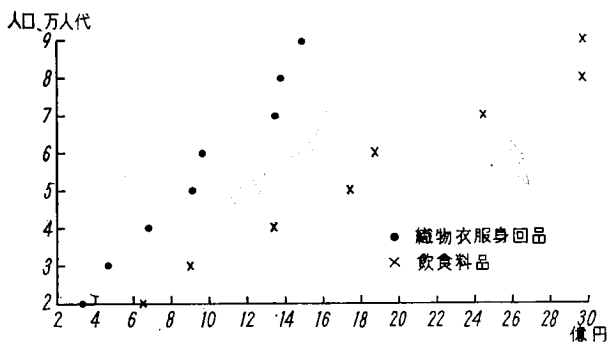
10万以上の都市の中、30万代からでは連続しないので、20万代までとして1万刻みの平均販売額がどのように分布しているかを示したのが第1図である。このようにしてみると、人口が多くなるにつれて販売額が多くなる状況が明らかに出ているのであるが、その割合は飲食料品の方が織物衣服身回品よりも高くなっている。

このような傾向は人口9万人以下の都市の方が顕著である。(第2図)

そこで、これらの分布を基にして傾向線を出してみる。この場合、都市



第1図 人口10—40万代の都市



第2図 人口9万以下の都市

規模との関係からみて、人口9万人以下と10万人以上では販売高の増加傾向が異なるのではないかという推定のもとに、両グループを別々に算出してみた。

その結果、人口10万人以上の都市では

$$\text{織物衣服身回品} \quad Y_x = 19.6 + 2X$$

$$\text{飲食料品} \quad Y_x = 36.9 + 4.4X$$

となり、

人口9万人以下の都市では

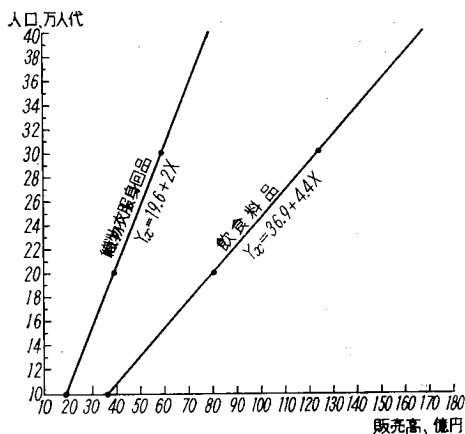
$$\text{織物衣服身回品} \quad Y_x = 3.05 + 1.7X$$

$$\text{飲食料品} \quad Y_x = 5.85 + 3.5X$$

となっている。

したがって、この関係をのぼしていくならば、次のような人口と販売高との関係が得られることになる。

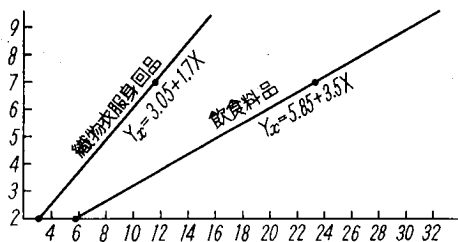
人口10万以上の場合



人口	織物衣服身回品	飲食料品
10万	19.6億円	36.9億円
20	39.6	80.9
30	59.6	124.9
40	79.6	168.9
50	99.6	256.9

第3図 人口10万人以上の都市の傾向線

また，人口9万人以下の都市の場合には次の関係が得られることになる。



第4図 人口9万人以下の都市の傾向線

人口	織物衣服身回品	飲食料品
2万	3.05億円	5.85億円
3	4.75	9.35
4	6.45	12.85
5	8.15	16.35
6	9.85	19.85
7	11.55	23.35
8	16.65	26.85
9	18.35	30.35

ところで，既述のように都市規模との関係から人口が9万人以下と10万人以上を別々に算出したのであるが，もし9万人以下の都市の傾向線をそのまま10万人以上の都市にあてはめると右のようになる。

人口	織物衣服身回品	飲食料品
10万	19.65億円	33.85億円
15	25.15	51.35
20	37.05	68.85
25	42.15	86.35
30	50.55	103.85

したがって，前にあげた場合よりも少ないことがわかる。すなわち，このことは人口9万人以下の場合と10万人以上の場合では人口が大きくなるにつれて販売高が増加する割合が異なっていることを示すものにほかならない。いうまでもなく，後者の場合の方が高くなっている。

ここでは人口が9万人以下と10～20万人代のグループから得られた傾向線を比較したのであるが，後者をさらに10万人代と20万人代に分ければこの両グループでも異なることになる。

したがって，人口が大きくなるほど販売高の増加する割合が大きくなるということがいえるであろう。それ故，傾向線についても概況としては直線であらわされるが，厳密には僅かに彎曲して上向きになってくるはずである。

## II 人口1万人当り販売高

単位人口当りの販売高はどのくらいになっているか、また、それは人口の大小とどのような関係があるかについて人口40万人代以下の都市について織物衣服身回品、飲食料品別に人口1万人当りの販売高を算出してみた。第6表がその結果である。ただし、この算出方法は人口1万人刻みで平均を出した第4表と第5表の販売高を1万人刻みの中間、たとえば35万人代は35.5万人として割ったものである。

第6表 都市人口1万人当り販売高(億円)

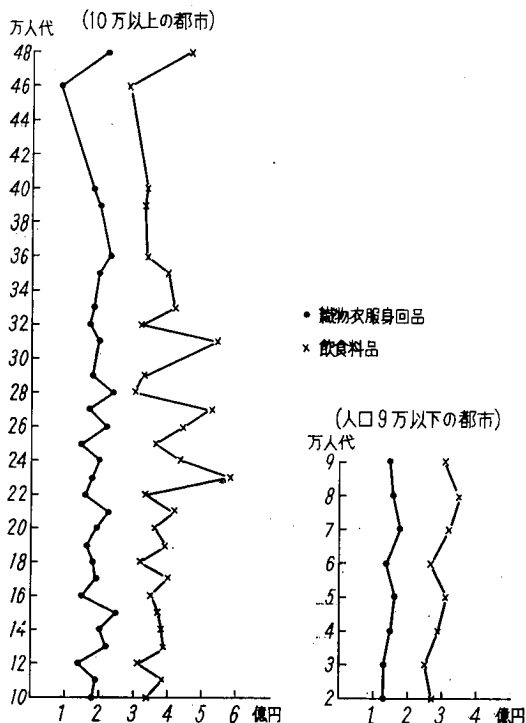
人 口	織物衣服 身回品	飲食料品	人 口	織物衣服 身回品	飲食料品
48万人代	2.2	4.6	19万人代	1.6	3.9
46	0.8	3.8	18	1.8	3.2
40	1.8	3.4	17	1.9	4.0
39	2.0	3.3	16	1.5	3.5
36	2.3	3.4	15	2.5	3.7
35	2.0	4.0	14	2.0	3.8
33	1.8	4.2	13	2.2	3.9
32	1.7	3.2	12	1.4	3.1
31	2.0	5.4	11	1.9	3.8
29	1.8	3.3	10	1.8	3.4
28	2.4	3.0	9	1.5	3.1
27	1.7	5.3	8	1.6	3.5
26	2.2	4.4	7	1.8	3.2
25	1.5	3.6	6	1.4	2.7
24	2.0	4.3	5	1.6	3.1
23	1.8	5.8	4	1.5	2.9
22	1.6	3.3	3	1.3	2.5
21	2.3	4.2	2	1.3	2.7
20	1.9	3.6			

こうしてみると、多少の相違はあるが、織物衣服身回品では2億円前後、飲食料品では3～4億円前後になっていることがわかる。

人口規模の大きい都市になるほど、1万人当り販売高がやや多くなっているような点もあるが、それも一概にはっきり言いきることもできないようである。

これをグラフであらわしてみると(第5図)この点をはっきりあらわれてくるのであるが、この図にも出てい

るように、人口規模の大小よりも、むしろ織物衣服身回品と飲食料品の比較の方がはっきり出ている。



第5図 人口1万人当り販売高

なお、第6表を平均してみると次のようになる。

人 口	織物衣服身回品	飲食料品
40万人代	1.6億円	3.6億円
30	1.9	3.4
20	1.9	4.0
10	1.8	3.6
9万人以下	1.5	2.9

このようにしてみると、9万人以下の都市では10万人以上の都市に比較して1万人当りの販売高が少なくなっているということがいえる。しかし人口10万人以上の都市の間では、人口が多くなるほど1万人当り販売高が多くなるということは必ずしもいえない。

### Ⅲ 小売総額に対する織物衣服身回品

#### および飲食料品販売額の割合

消費者の支出面からみて、消費支出に対する衣料費や食料費の割合は家計費支出構成費によって知られているが、小売販売額からみた場合の割合は算出されていない。

そこで、この割合を人口10万人以上の都市（第7表）と人口9万人以下

第7表 小売総額の平均に対する織物衣服身回品および飲食料品  
平均販売額の割合（人口10万人以上の都市・%）

人 口	織物衣服身 回品の割合	飲食料品 の 割 合	人 口	織物衣服身 回品の割合	飲食料品 の 割 合
100万以上	15	35	25万人代	16	40
80万代	17	44	24	19	41
70	16	35	23	18	55
50	20	38	22	20	41
48万人代	16	34	21	21	38
46	14	47	20	21	48
40	18	35	19	18	44
39	23	36	18	20	34
36	21	33	17	18	39
35	18	36	16	18	42
33	17	41	15	23	34
32	18	34	14	20	38
31	18	49	13	23	40
29	19	35	12	18	40
28	26	33	11	20	41
27	17	53	10	20	37
26	18	36			

の都市（第8表）に分けて算出を試みた。

第8表 小売総額の平均に対する織物衣服身回品および飲食料品  
平均販売額の割合（人口9万人以下の都市・%）

算出式	織物衣服身回品販売額 (地方別平均) 小売総額(地方別平均) × 100								飲食料品販売額(地方別平均) 小売総額(地方別平均) × 100							
	9	8	7	6	5	4	3	2	9	8	7	6	5	4	3	2
人口代																
北海道		14	17	20	19	18	21	15		51	31	39	58	43	41	68
東北	22	22	18	24	25	23	21	19	42	39	24	42	38	35	38	37
関東	21	19	21	20	21	18	20	17	42	43	37	43	41	42	38	36
北陸	20		23	24	24	22	23	24	39		38	37	38	45	37	37
中部			24	25	21	19	22	21			37	37	39	38	38	39
東海	21	20	21	22	18	29	19		41	45	38	39	42	34	42	
近畿	23			23	21	23	17	25	39			37	37	33	35	24
山陰	19			26	20	21	16		29			31	37	36	48	
山陽	24	22	24	21	20	16	19	20	36	32	31	41	39	46	38	42
四国				26	22	19	20	18				35	34	36	41	39
九州		23	20	17	27	19	20	19		31	36	33	38	38	40	40
衛星都市	8	14	8	16	12	12			57	43	51	49	47	47		
全国	20	19	20	21	22	20	20	20	41	41	37	40	42	39	39	39

全般的には、織物衣服身回品が約20%位であり、飲食料品が40%前後であるということになる。

人口10万人以上の都市では20万人代、23万人代、27万人代、31万人代、46万人代の都市の飲食料品の割合が50%前後で高い。しかし、これらの都市はいずれも織物衣服身回品が特に低いわけではない。逆に低い方では28万人代、36万人代などの都市があげられる。

これに対して、織物衣服身回品では特に大きな高低の差がなく、強いていえば、高い方では28万人代の26%があり、低い方では25万人代、70万人代の16%、100万人以上の15%などをあげることができる。

人口9万人以下の都市では、全国で見ると織物衣服身回品で20%、飲食料品で40%という割合がかなりはっきり出ている。



なお、衛星都市はどの人口グループも織物衣服身回品では低く、飲食料品では高くなっていて他の都市と異なっていることがわかる。

#### IV 飲食料品販売額に対する織物衣服

##### 身回品販売額の割合

この項についても、前述の項目と同様に人口9万人以下と10万人以上に分けてみる。その算出は飲食料品販売高の人口別平均に対する織物衣服身回品販売高の人口別平均の割合として計算し、さらに人口9万人以下の都市についてはこれに地方別を入れて、地方別人口別平均を利用している。

全般的には50%前後になるのであるが、人口10万以上の都市では15万人代の68%、28万人代の79%などは特に高く、23万人代の33%、27万人代の

第9表 飲食料品販売高に対する織物衣服身回品  
販売高の割合 (人口10万人以上の都市・%)

人 口	割 合	人 口	割 合
100万以上	43	25万人代	41
80万代	38	24	46
70	47	23	33
50	54	22	49
48万人代	48	21	56
46	31	20	51
40	52	19	42
39	62	18	61
36	64	17	47
35	50	16	43
33	42	15	68
32	54	14	52
31	37	13	57
29	55	12	46
28	79	11	49
27	32	10	54
26	49		

第10表 飲食料品販売高に対する織物衣服身回品販売高の割合 (%)

$$\text{算出式} \quad \frac{\text{織物衣服身回品販売高 (地方別平均)}}{\text{飲食料品販売高 (地方別平均)}} \times 100$$

人口 万人代	9	8	7	6	5	4	3	2
北海道		28	53	53	38	41	52	22
東北	53	56	73	57	65	66	55	51
関東	51	44	58	46	52	43	53	47
北陸	52		60	64	63	55	62	66
中部			63	66	54	49	58	55
東海	50	45	56	57	42	92	45	
近畿	59			63	57	68	48	101
山陰	64			83	54	58	33	
山陽	66	69	77	52	52	36	51	49
四国				75	65	52	49	47
九州		74	56	51	71	52	49	47
衛星都市	15	33	17	33	26	26		
全国	50	46	55	52	52	51	52	51

32%, 31万人代の37%, 46万人代の31%, 80万人代の38%などは低い方である。

このように、人口10万人以上の都市ではかなりの幅があり、高率の方では

39万人代	62%	18万人代	61%
36万人代	64%	15万人代	68%
28万人代	79%		

があり、低率の方では

80万人代	38%	27万人代	32%
46万人代	31%	23万人代	33%
31万人代	37%		

などとなっている。

しかし、全体の平均をとってみると約49%であり、結局、人口9万人以下の場合を含めて全体としては約50%前後ということになる。

もちろん、このような割合からみてかなり異なった傾向を示す都市もある。そこで、これを織物衣服身回品が飲食料品よりも多い都市と反対に織物衣服身回品の飲食料品に対する割合が特に低いものをあげてみる。ただし、この割合が特に低い都市には衛星都市が大抵入っているので、ここでは衛星都市（人口10万人以上も含む）を除くことにする。

a. 織物衣服身回品の方が多い (単位万円)

	織衣身	飲食料
沼津(静岡)	990,103	671,910
館林(群馬)	171,439	166,542
田辺(和歌山)	172,538	158,089
中津(大分)	204,379	172,957
五所川原(青森)	115,335	105,883
常陸太田(茨城)	91,587	73,068
水海道(茨城)	90,586	88,318
七尾(石川)	138,663	132,775
都留(山梨)	129,142	68,041
八日市(滋賀)	90,643	89,042
西脇(兵庫)	110,818	109,078

b. 織物衣服身回品が特に少ない

京都(京都)	2,351,693	6,197,074
北九州(福岡)	1,619,653	4,108,568
下関(山口)	385,501	926,632
富山(富山)	437,827	1,978,009
小樽(北海道)	318,905	945,993
福島(福島)	183,386	706,937
奈良(奈良)	200,017	519,744
長岡(新潟)	222,135	567,347
鈴鹿(三重)	80,539	244,215
夕張(北海道)	101,160	464,330
芦別(北海道)	75,980	282,629
千歳(北海道)	84,847	188,492
磐城(茨城)	86,233	215,807
北茨城(茨城)	28,852	148,646

小	山(栃木)	83,262	228,275
行	田(埼玉)	53,322	145,857
上	尾(埼玉)	46,926	142,662
浜	北(静岡)	35,237	108,895
富	士(静岡)	72,800	210,450
高	砂(兵庫)	53,848	184,540
櫃	原(奈良)	36,014	102,631
荒	尾(熊本)	18,152	128,213
三	笠(北海道)	45,833	200,200
赤	平(北海道)	64,976	199,340
天	童(山形)	28,526	94,499
内	郷(福島)	16,928	101,402
安	中(群馬)	25,262	132,836
佐	倉(千葉)	22,309	101,306
飯	山(長野)	41,268	222,784
土佐	清水(高知)	18,869	60,369
中	間(福岡)	20,384	107,442
山	田(福岡)	18,537	71,159

## む す び

都市の人口規模と小売商業との関係をみるために、まず小売総額をとりあげ、次いで今回は織物衣服身回品と飲食料品の小売販売額をとりあげてみたのであるが、特に今回の分析によって次の点を知ることができた。

- (1) 人口規模の変化に応ずる販売高の傾向線は、全般的には直線であらわされる。この点については次の人口1万人当り販売高の問題が関係する。
- (2) 詳細にみれば、人口グループ別によって傾向線の傾斜の度合は異なる。しかし、人口1万人当り販売高の差が僅少という点からみれば、傾斜度の差は小さいとみられる。
- (3) もっとも、人口9万人以下と10万人以上では、単に人口の量的相違ばかりでなく、都市勢力の差が含まれているので、9万人以下と10万人以

上では販売高の傾向が異なっているとみられる。

- (4) 衛星都市については小売総額についても人口1万人当りの販売額の少ないことが指摘されたのであるが、これを織物衣服身回品と飲食料品に分けることによってさらにその状況が具体的にになってきたといえる。
- (5) 最後に、第3図、第4図にも出ていたように、人口が多くなるにつれて織物衣服身回品の販売高、飲食料品の販売高ともに増加するのであるが、増加の状況は後者の方が大きいという点を指摘しておかなければならない。

今回の分析によって出てきた結果が、39年商業統計にだけみられるものであるか、あるいは一般的傾向とみられるかについてはここで速断できない。通常商業統計の分析という点ではかなり一般性があるものと解されるのであるが、この点はさらに他の年度の商業統計を分析することを重ねながら確認をすることにしたい。